

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:高野 嘉裕 所属:大分県立別府支援学校 記録日:2021年 2月 5日

キーワード: 他者理解と自己理解、コミュニケーション、心的ストレスの解消

【対象生徒の情報】

○学年

中学部2年生 男子生徒

○障害名

小児心身症、知的障がい、自閉スペクトラム症

○障害と困難の内容

- ・小学校の時は学習のつまずきなどで登校できないこともあった。
- ・文字のみや音声のみの指示は理解が難しく、情報などは視覚を介して伝える方が理解できる。
- ・他者の気持ちを理解したり、推測したりすることが苦手である。
- ・ストレスがたまると腹痛、下痢、嘔吐、またはチックが出てくるなど身体症状として現れる。
- ・WISC-IVの結果は、全検査(FSIQ)73、言語理解(VCI)88、知覚推理(PRI)76、ワーキングメモリ(WMI)71、処理速度(PSI)76
- ・新しいことや経験が少ないことに対して緊張やストレスからパニックのような状態になることがある。その際は思考や行動などが困難な状態になる。
- ・パニックが大きい場合には泣き出したり、他害行為に及んだりすることもある。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・授業内容のフォローや、家庭学習を行っていく中で、自分の苦手な部分や理解ができなかった部分がで
きるようになったという積み重ねをしていくことで自信につなげる。
→ [OneNote] や [単語帳メーカー] を使用しながら、学習内容の理解や定着を深めるとともに、自分で学習内容
のポイントを絞ることができるようにするなど、にしていきたい。また、コロナ禍における学習の保障の手段として
の活用も視野に入れていきたい。
- ・機器の便利さや有効性を知り、活用できるようになることで生活における不安や困難を自分で解決でき
るようになる。
→ 人間関係が起因となる、情緒の不安定さや、精神的な不安を抱えてしまうことに対し視覚的な支援を行うとともに
に [By Talk for School] を活用しながら、不安の原因を考えてみたり、自分の行動を見直してみたりすること
に繋げていきたい。

○実施期間

令和2年4月～令和3年1月まで

○実施者

高野 嘉裕

○実施者と対象児の関係

担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・主たる障がいは「小児心身症」であり、知的障がいと自閉スペクトラム症を併せ有しており、本校ではⅡ課程（知的障がい特別支援学校の教育に準じた課程）に在籍している。
- ・自身のスマホを持ち、家庭には Andoroid のタブレットも所有しているが、検索したり調べたりすることについては経験が少ない。
- ・学習が難しくなることで理解が難しくなると、その教科に対する抵抗感につながる。
- ・怒りや不安を自分の中で繰り返し思い出し、感情が大きくなってしまう。

○活動の具体的内容

「定期テストに向けた試験対策」

本校はⅠ課程の生徒を中心に定期テストを実施している。今回の対象生徒はⅡ課程に在籍しているが、その学習内容はⅠ課程の生徒と同じような内容であり、授業を同じ教室で受けることもある。対象生徒も1年生の頃から定期テストを受けてきており、その点数を非常に気にする様子も見られる。学習やテストに際して、本人の困難さの一つである「学習の定着が難しい」という部分に加えて、多くの情報の中から自分に必要な情報を探し出すスキルということも課題となっていた。そのため、今回の定期テストではポイントとなる部分を教員と一緒に探し出し、単語帳カードを作成していくことにした。

作成にあたっては…

- ・各教科の教員と情報交換を行い、生徒の苦手なポイントを把握する。
- ・本人にも聞き取りなどを行い、自分が苦手と思っている部分を確認できるようにする。
- ・授業プリントなどを一緒に確認しながら、ポイントとなる部分に印をつけていく
- ・ポイントの部分について、単語帳メーカーに「問題」と「答え」として記入していく。

使用したアプリ

この取り組みで使用したアプリは[単語帳メーカー]である。無料で様々な単語帳が作成でき、クラウドを使用したり AirDrop で共有したりすることができる。また、間違えた単語のみをやり直す機能などもついている。



2学期の作成は教員主導で行ったが、「答え」に対して「問題」を作成していくことが、本人にも学びとなっていった。次回は作成段階から任せていきたい。

↓

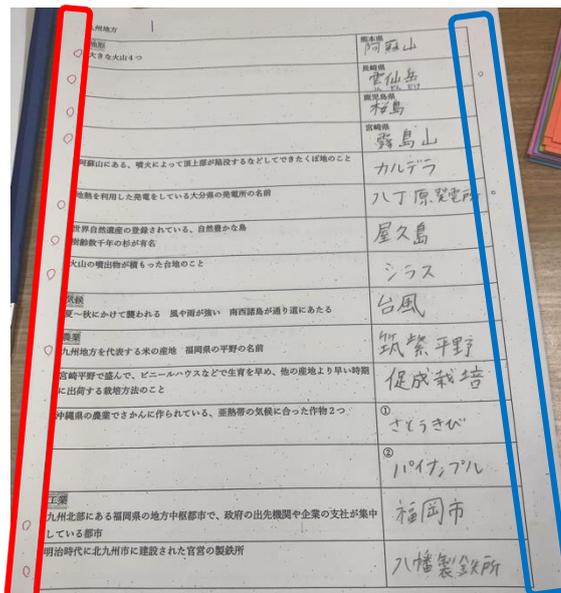
学校や家庭で繰り返し学習を行ったため、テストの結果は、本人も満足のできる内容であった。

前回の定期テストでは、学習内容の要点を見つけること、単語帳カードの作成などは教員が主導で行った。3学期の定期テストでは、自分で要点を見つけること、単語帳カードを作成することを本人に行ってもらったようにした。

まずは、教科の教員が作成したテスト対策プリントから、本人が重要だと思う部分に印をつけるようにした。

この時に、本人の特性から、ほとんどの部分に印をつける姿が見られた。(図1 赤枠の中)

できる部分や覚えている部分にも、不安から印をつけていたが、改めて一緒に問題を解きながら、教員が別の印をつけるようにしてみた。(図1 青枠の中)この差を見比べるようにすることで、本人の不安も減少して、自分が苦手としている部分だけを単語カードとして作成することができた。



「他者理解と自己理解のための取り組み」

対象生徒の困難さの一つに、他者の感情を理解したり推測したりすることの困難さ、想像することの困難さがある。他人のパニックに不適応行動などに対して「なぜ怒っているのか?自分が悪いのか?」と考えたり、「本人が悪い!家庭が悪い!」などの怒りとなり表出することが多かった。他者に対しての怒りという発散方法でしか、このストレスをやり過ごす方法がなかったようである。そのことは一時的な発散にしかならず、後にフラッシュバックのように怒りが再燃したり、自分で怒りを反芻して増幅させていたようであった。こうした背景には、他者の気持ちを考えることが難しい、または他者がどのような状況なのかを想像することが難しいということが原因にあると考えた。このような発散方法よりも、自己の行動を変化させることで回避できるものがあるということに気づけるようにしたいと考えた。

パニックや不適応行動を起こす友だちとの関係については、対象生徒は「仲良くなりしたい」という気持ちはなく、クラスメートとして落ち着いて過ごしたいという気持ちになっていた。友だちから話しかけられた場合には普通の友達として接することもできている。特別支援学校という環境を考え、今後数年間一緒に過ごすことにもなるかもしれないということから、自分で回避できるようになる力は必要であると考えた。

友だちとの
相互関係を図示

取り組み①「関係性の把握」

クラスメートとの人間関係で悩み、不安定な時期があった。この頃は送迎の車の中で保護者の髪の毛をいきなり引っ張るなど危険な行動も見られたため、まずは手書きのマップでクラスメートの思いと、本人の気持ち、そして感じたことなどを可視化してみた。



友だちの行動に
対する対処方法
を考え文字化

取り組み②「自分の行動を思い出す・考える・見直す」

最初の取り組みから、自分の行動を思い出しながら、振り返ることが可能であり、そこから自分の行動を修正しようという気持ちになることができるのではないかと考えた。これには、友だちのパニックに対する行動が変化してきたためである。以前まではパニックの友だちを横目で何度も見ながら気にしていたが、自分からその場を離れることができるようになってきた。モデル的な行動を説明したり、示したりすることが有効ではないかと考えた。そこで、友だちの行動→自分がどうするか?ということをも文字にして確認するようにした。

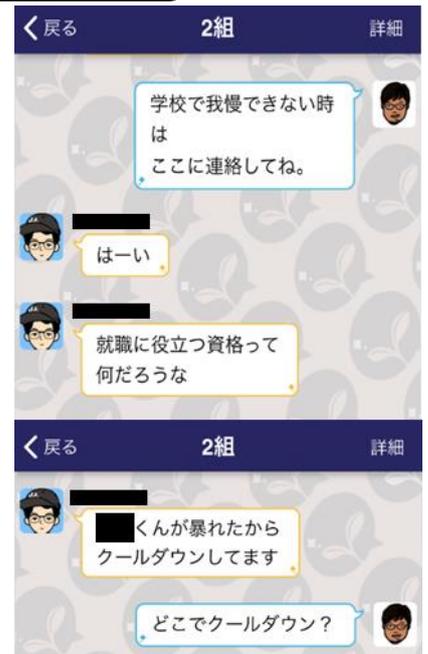
また、相手の生徒については、自分の求める姿と自分の実際にできることのギャップに苦しんでいることが多く、そのことからできない場面でパニックが起こることが多かった。パニックになると友だちに対しても言葉遣いや態度が荒くなり、そのことから友だちとのトラブルにつながる場面が多い。担任と共通理解を進め、学習や生活面での支援を行っている。また、学部内でも共通理解を行い、統一した対応を行うことでパニックの回数も少しずつ減少してきている。

取り組み③「自分からサインを出す」

ストレスを感じた時や精神的に苦しい時にも、我慢をしてしまうことがある対象生徒は、それがその後の不安定さにつながることで、家庭とのやり取りで見えてきた。自分が苦しい場面で他者に対して SOS を出せることは、今後生きていく際に必要な力と考え「ByTalk for School」による担任とのやり取りを行うことにした。これまで親しい人とは SNS などでもやり取りをしている経験もあるが、適切な距離を保ちながらのやり取りを経験する機会とも考えた。

開始当初はお互いに向き合っのやり取りで練習などを行い、その後 iPad を教室においておくことで自由に書き込みなどができる環境にした。これまでに担任へのサインと思われる書き込みは一回であるが、自分から発信してきたことを大いに褒め、今後につなげるようにした。

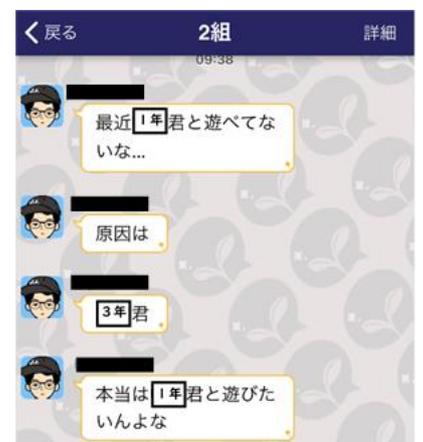
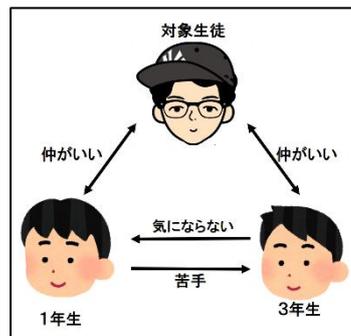
このルームは対象生徒と担任の2人のみでやりとりしている。



その後の取り組みから

「By Talk for School」に関しては、その後も使用を続けていたが、基本的には趣味の話などをアプリ上で行うことが続いていた。しかし、ある日、本人から「By Talk for School」を介して相談を受けた。仲の良い友だちに対しては、本人の優しさから「断る」や「拒否」ということが難しく、ストレスとして抱えてしまう対象生徒は、先輩と後輩の間に挟まれている状態にあったが、そのことについては何度たずねても「別に大丈夫!」という返事ばかりだったので驚いた。

日頃はふざけた話なども多かったが、このようなことがあると、本人にとって話しやすい、伝えやすい場になっていると感じた。



○対象児の事後の変化

これまではどこを中心に学習をするべきかを見極めることができずにいた。今回のように、自分でポイントを考え、自分が学習しやすいようにまとめることは、それまでに授業等で学習したことの振り返りになり、繰り返しの学習による定着につながった。また、これまでのようにただテスト範囲の学習を行っているよりも、本人としても充実感や達成感を感じることができたようで、学習に対するストレスなどの精神的な部分にも変化をもたらしてくれたように感じた。

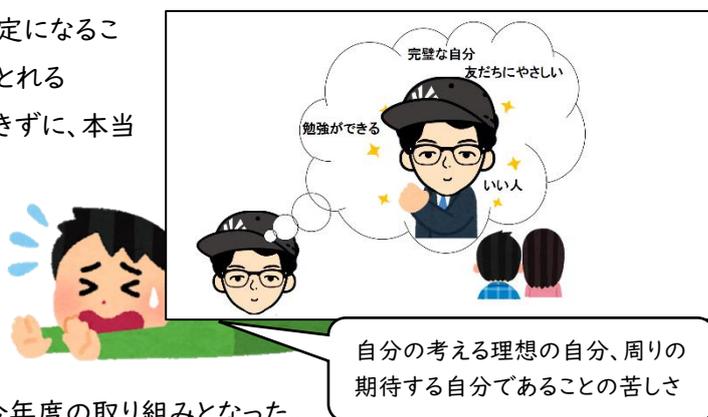
学校では学習を振り返りながら、ポイントをまとめたり絞ったりしながらカードの作成を行い、家庭ではiPadで振り返りの学習を行った。保護者に問題を出してもらったり、逆に問題を出し、答えの解説をしたりする姿も見られた。その学習が自信となり、テストの結果として返ってきた。

他者理解と自己理解の部分では、主に他人とのかかわりについて変化が見られた。他人との気持ちの違いを图示したり、変化を表したりすることで、自分以外の人の気持ちなどを感じることができるようになってきた。また、それに合わせて自分の気持ちを抑えることでストレスを蓄積していた部分には、逃げることや逃げる場を認めたり設定したりすることでストレスの軽減につながったように思う。このことはパニックや家庭での他害行為が減少したことからも変化を感じることができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

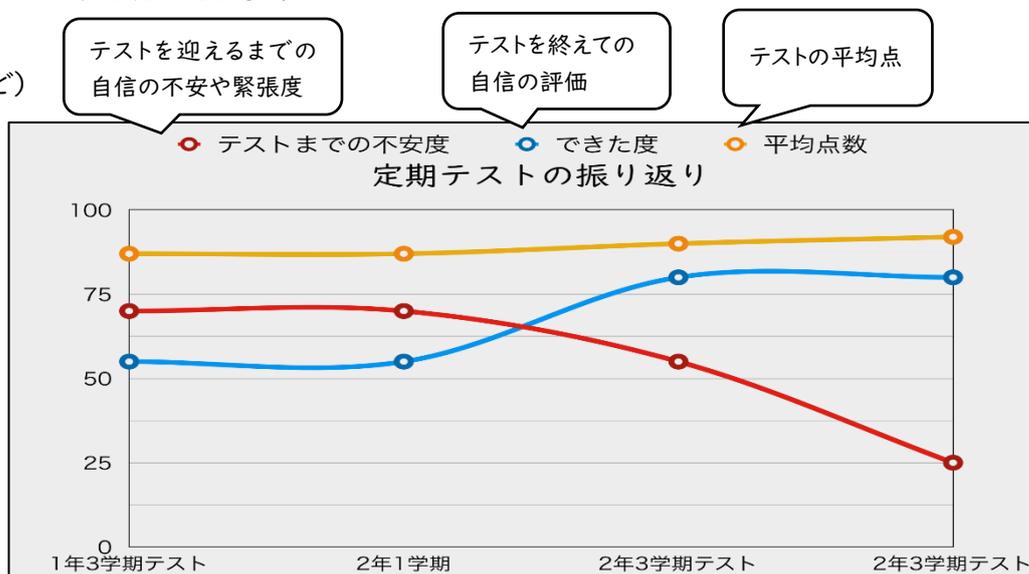
テスト期間になると、テストに対する不安から情緒不安定になることがあり、その原因は「テストで自分が目標とする点数がとれるか・・・」ということであった。友だちの誘いを断ることができずに、本当に遊びたい友だちと遊ぶことができないこともあった。良い点を取る自分でなければならない、友だちには優しい自分でなければならない、周りの期待に応える自分でなければならない・・・これらの考え方を完全に覆すことは難しいが、本人が学習しやすくなったり、自分で軽減したりすることができるのではないかと考え、今年度の取り組みとなった。



家庭ではパニックや他害行為、破壊行為などもあるが、学校ではそのようなそぶりは見られない。やはり、家庭と学校という場の違いもあると思われる。「ByTalk for School」というアプリは完全にクローズドな環境でのやり取りである、それは個人情報の安心感もあるが、それよりも教師とだけつながっていることの安心感になったと考える。その安心感が、これまでにない「相談・愚痴」という形で現れたと思う。

・エビデンス(具体的数値など)

各回テスト終了後にテストの感想を含め、本人に評価をもらった。やはり、自分が勉強に取り組んだ分、自分の不安が減っているようである。また、その学習が自分で考えたものであると、さらに自信をもって取り組むことができ、結果としても現れている。

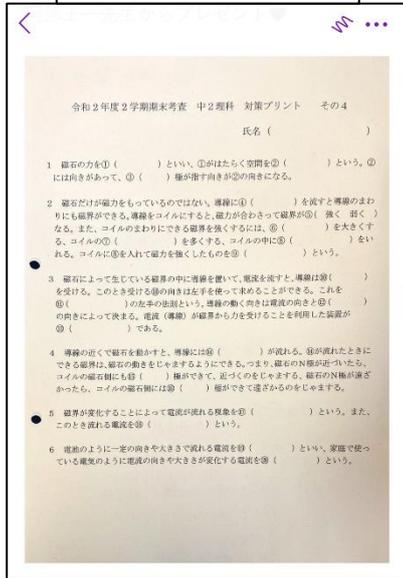


・その他エピソード(画像などを含めて)

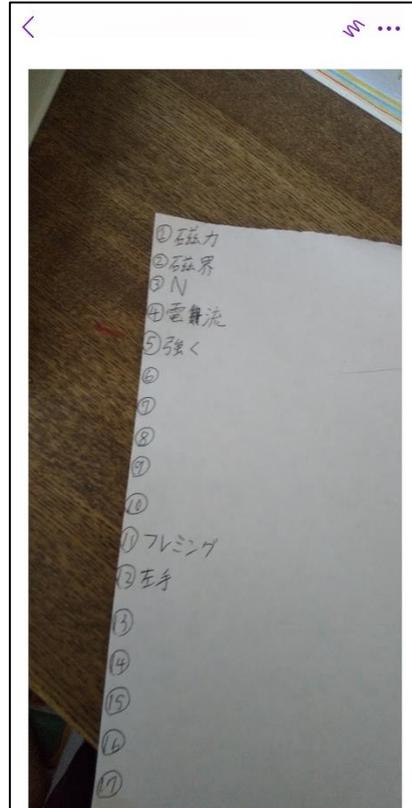
年度当初のコロナによる休校中には、学校の端末と本人のスマートフォンで「OneNote」を使用し、課題を出し、提出してもらっていた。

第2派が広がってきたところに、兄弟児の関係でテスト前に学校を休まなくてはならなかった時に、理科担当の教員から課題プリントを出してもらい、テスト勉強を行うことができた。テスト前に学校に来ることができずに不安定になっている様子もうかがえたが、その中でも自分の事を振り返って見ることができていることに驚かされることがあった。

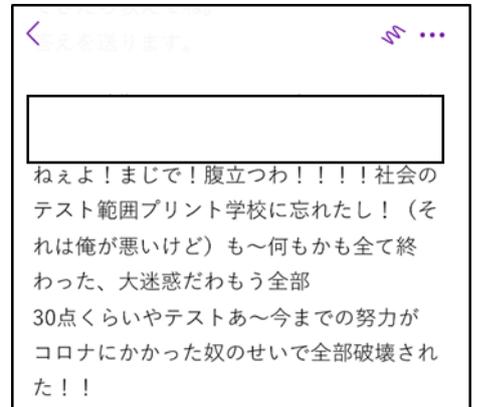
送信した課題プリント



返信があった解答

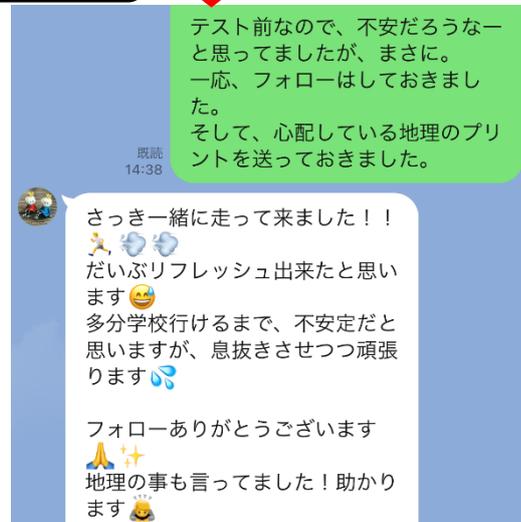
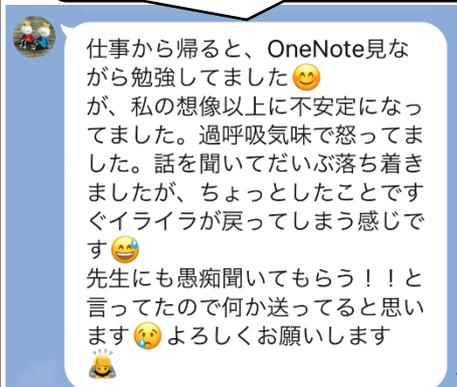


その時の心境(不安定)



不安定だった結果
回答数が少なかった

対象生徒の保護者とのやりとり。
テスト前の出席停止により不安定な状態であった。



妹の小学校でコロナ陽性者が出たことにより、本人も出席停止ということになり、直接の支援等が難しかったが、年度当初の取り組みのおかげで、学校から学習のサポートをすることができた。